

---

# 神国 第壱部～虚しき深淵より来たる者～

邪部そとみち

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

神国 第壹部「虚しき深淵より来たる者」

### 【Nコード】

N8528Z

### 【作者名】

邪部そとみち

### 【あらすじ】

10年ほど前に自サイトに掲載していた物です。20年以上前に参加していた創作同人サークルにて皆でキャラクター（オリジナルの神キャラクター）を出し合い、それを元に私が別PNで執筆した物です。厨二病真っ盛りな内容で途中で執筆も中断しているのですが先日何となく懐かしくなっただけ読み返し、黒歴史な恥ずかしい気持ちと、誰かに見てもらいたい気持ちがイイ感じで湧き起こってしまいこちらに掲載することにしました。「本編あらすじ」天地に数多くの神々が宿り人間や精霊達とともに暮らす異世界「神国」

ある時神々や人間の負の精神エネルギーから一柱の神が誕生した。  
誕生直後にその神は力を半減させられたが600年後、自らの力の  
一部を偶然取り込んで錯乱した若神と出会い「神国」に反旗を翻す  
…。 2012年の早い内に中断した続きを書きたい気持ちもあり  
ます。頑張りたいです…。

## <序章・美しき広き郷>

<序章・美しき広き郷>

照葉樹の密林は、降り注ぐ陽光と暖かな風をその身に受けて揺れていた。

森の中を吹き抜けていく微風は、年を経て節くれだつた梢を揺らして行きながら、濃緑の森の香気に染められていった。

風に揺れる梢の他、動く物は何一つ無く、静寂と濃密な木々の香気だけが森の中を満たしていた。

メル・ロー大陸、ダイナ山脈の北の外れ。

天を覆い尽くさんばかりに生い茂っている照葉樹の密林は、人間はおるか、神々ですら訪れる事の無い場所だった。

風が吹く度に、空を埋める無数の葉は淡い緑のきらめきを放ち、日の光は柔らかに濾過されて地上に零れ落ちて行った。

そんな密林の奥底に、木漏れ陽を受けて鏡の様に輝く小さな湖があった。

その湖の浅瀬に、白い裸身を横たえている女神の姿があった。

淡い光すら眩しそうに目を細め、女神は長い時間、そうやって水に浸り続けていた。

濃緑の森の息吹を胸に吸い込む度に、女神の裸身は浮き沈みを繰り返した。その豊かな胸もまた、緑に染まつた水面で上下した。

湖のすぐ側の大きな楠が、上半身に若草色の光の粒を纏い、下半身に薄い藍色の影をはいていた。

木々の茂みの切れ間から覗く空は、何処までも青く澄

み渡っていた。

だが、女神はいつしかそれらを見る事も忘れ果てその全ての思考と感覚は、ひんやりとした水の中に消え失せていた。

女神はただ、忘我の境の中、光を浴び続けていた。

女神の命の全ては果てし無く澄み渡り、いつか、世界の全てと溶け合い漂っているのだった。

女神の体の奥から一つの温もりがこみ上げ、それは女神の細い喉を震わせる言葉と化した。

「ああ……、世界は美しい……。」

女神の呟きは微風の中に掻き消え、女神はゆっくりと瞼を下ろした。

女神はこの世界の生まれた次の瞬間に誕生し、その時から永遠にも近い長さの命を生き続けてきた。

幾億の幾億乗、幾兆の幾兆乗　どれ程の年月を生き、どれ程の数の命の営みを見続けて来たのだろうか。

常に過去を見つめ、世界の全てを見つめ続ける事が女神の司るべき宿命だった。

過去を振り返る女神の顔を見た者は誰もいない。

女神の名は「哀しみ」　ゴレミ力と言う。

森の何処からか、暗い風が吹きつける気配があつた。突然穿たれた小さな穴から吹いて来る、暗く冷たい空気が。

それは、この森ではない　遙か遠く離れた異なつた世界へと続いている次元の穴だった。

そこから吹きつける風はこの森の浄寂とひどくそぐわない、憎悪と怨念の喧騒を伴ったものだった。

ゴレミ力は森の異変に気付くと、体を起こして岸へと

上がった。

水に濡れてもつれ合った髪を拭き、頭の両端で結わえ直した。

次第に、不快な臭気が森の空気に混ざり始めているのをゴレミ力は感じ始めた。

嫉妬や憎悪、恨みの叫び。それらは余りにも生臭い匂いを撒き散らし、ゴレミ力の感覚を刺激した。

「！」

溢れ出る風は、次第に濃度を増し、渦を巻き始めた。

やがて、それらは一点に凝縮し、形を成し、意識を持ち、一つの命を持つようになった。

この森よりも遙かに遠く離れた世界から、その命は生まれ出ようとしていた。

太古　いや、それよりもずっと以前の、世界の原初の時代にゴレミ力が誕生した時の様に。

しかし、遙かに禍々しく邪悪な神が、この世界へと生まれ来ようとしていたのだった。

傍らの木の枝に掛けておいた衣服を身に着けると、ゴレミ力は精神を集中した。

女神の念の力は、その身を重力の束縛から解放した。宙に浮かんだゴレミ力の前を、一陣の疾風が駆け抜けていった。

風は互いに絡み合った木々の枝を掻き分け、ゴレミ力の行く先を示して一つの道を作り出した。

禍々しい命の誕生しようとする気配が、道の彼方に、はつきりと感じられた。

この世界の秩序を乱すものに間違いない。

永い、永い年月を生きてきた女神の直感が告げた。

何としてもその誕生を阻止しなければならない。

ゴレミ力は決然と顔を上げると、異世界からの空気の

渦の中心へ向かって飛び立った。

いつの時代の事か。

何処の場所の事か。

神々と人間と、あまたの命の生きる世界がある。

天と地と海とに幾多の神々が溢れ、人間と共に生き、  
日々を営んでいる世界がある。

その郷の名を

「神国」。

そんな世界の、これは神話

## 第1章「昏い処」

この世界に存在している一切の物質に内在し、その現象の全てを支配しているエネルギーがある。

そのエネルギーは無数の流れを形成し、世界を川のように巡っている。

その場所は地下であったり、遙かな上空であったりする。その流れは、レイラインと呼ばれている。

レイラインは時に渦を作り、時に四方へと飛散する。

その地点は集束点と呼ばれ、特に生命力に溢れた土地となっている。

しかし一方で、レイラインは憎悪や怨念と言った負のエネルギーの流れも形成している。そうしたエネルギーは集束点から地底へと流れ込み、虚空と呼ばれる異界へと続き、その果てで浄化される。

だが、時に淀んだ流れの中から邪悪な神や魔物が誕生する事もあった。

光とも煙ともつかない黒い物が激しい渦を巻く中で、無数の怨嗟と絶叫が響き渡っていた。

神々や人間達から吐き出された諸々の欲望や執念。

レイラインの流れに乗り、この地上ではない遠く昏い遙かな虚空の果てへと去り往くべきそれらは、本来の流れに逆らって地上に溢れ出そうとしていた。

犯したい。食いたい。壊したい。殺したい

もはやそれらは抱いていた者達から離れ、理性や常識の制約も受けず、純化された激しさと毒々しい輝きだけを垂れ流すのみだった。

やがて。



ばらばらに放出されていたそれらのエネルギーは、次第に一つの形を取ってまとまり始めた。

……たい。……生きたい。

激しい欲望のエネルギーは、一つの言葉　一つの想念の絶叫としてまとまっていった。

生きたい。……生きたい！

暗黒の渦が絶叫の雷鳴を伴って、ただ一点へと収束した。

濃緑の光と香りに満たされた、森の静寂の風景へ、一筋の亀裂が走った。

次元に穿たれた暗黒の穴を押し破り、黒血を思わせる闇が滴り落ちた。

常緑の下草に覆われた地面を汚す闇の血を先触れに、漆黒の煙を噴き上げながら、その者はこの地上へと産み落とされた。

それぞれがばらばらに渦を巻いていた欲望と執念のエネルギーは、一つの「我」を持つ存在として結晶した。

「我」……「我」は、レウ・ファア。

虚空の深淵へと沈むべき、神々や人間の欲望や執念から生まれた神。

闇よりも尚、昏く深い虚空の流れの中から独り、成り生まれた神。

そして、地上の神々と人間の営みから遙かに離れた彼方から来た神。

球状の脳と、それを覆う無数の触手。前頭葉から覗く一つの眼球。それがレウ・ファアの姿だった。

「私は、生きたい。」

己を形作った欲望そのままに、レウ・ファアは生まれて初めての言葉を紡ぎ出した。

言葉の響きと同時に、レウ・ファアの脳裏には、自ら

の生命の素材となった欲望や執念に、残滓の様に付随していた様々な知識や感情が入力されていった。

そうした知識は、前頭葉の眼球を通じて入ってくるこの森の中の様子を凄まじい速度で意味付けしていった。

だが、レウ・ファアがこの世界全てを理解し、自らの存在を理解し切るには余りにも情報が乏し過ぎた。

「欲しい。」

世界を、自分を理解する情報を。

世界そのものを。

「何が欲しいのですか？」

未だ森の中に漂う昏い気配を打ち払う様に、ゴレミカの澄んだ声が響きわたった。

自分へと向けられた声に反応する行動は、まだレウ・ファアの中に確立されてはいなかった。

なニガほしいノデスカ。ゴレミカの呼び掛けも、まだ音声の組み合わせに過ぎなかった。

ゴレミ力はその神の余りの無反応ぶりに、暫くの間当惑した。

森。緑。光。空気。水。虫。鳥。木。花。

レウ・ファアは触手をうねらせながら、暫くの間宙を漂っていた。

ゆっくりとした回転をしながら、眼球は辺りの景色を眺めていた。その瞳に捉えられた様々な物や現象は、瞬く間に分析され、整理されていった。

僅かの時間の内に、驚くべき速度でレウ・ファアの自我は構築されていったのだった。

レウ・ファアは初めて、近くに佇む後ろ姿の女神へ目を向けた。

「オマエ　お前。……そうか。お前は私ではないのだな。　　この全てのものは私ではないのだな。」

自己の認識と確立。それは、この世に生まれ落ちた者が最初に陥る絶望だった。

我と彼。自分と自分でないものの認識　この世に生まれ落ちる前、世界は彼我の区別も無く、「私」は世界の全てと等しく、世界は「私」そのものであった。

「私は、欲する。」

欲望の宣言は、レウ・ファーにとっての産声だったのだろうか。

この世に誕生し、「私」は世界から切り離されてしまった。

私と、私ではない者達。世界はあまりに巨大で、不可解で、広大なのに　そこから切り離された「私」は余りに小さ過ぎる。

自己の拡張　己の周囲を認識し、理解していく事は「私」と世界との再合一に他ならなかった。

世界が再び「私」となり、「私」が再び世界そのものとなる為に。

「私は、欲しい。」

世界を、自分を理解する情報を。  
世界そのものを。

「あなたは……。」

繰り返される呟きにゴレミカは戦慄した。

この神が何を望むのか、何が欲しいのか。

あまたの命の営みを見守り続け、永遠にも近い遙かな時間を生きてきた哀しみの女神は、この目の前に浮遊する脳髓の神の願いを理解した。

意識ある全ての存在が抱く根源的な絶望と欲望は、しかし、虚空の暗黒の流れの中に晒され、余りにも異質で邪なものへと歪んでしまっていた。

「私は、欲しい。」

レウ・ファアは、周囲の木々や地面に幾筋かの触手を伸ばした。赤味がかった細い管は先端から透明な粘液を滴らせ、木の肌や石の表面に付着するとそこから変質が始まった。

触手の食い込んだ木や岩は、無数の血管の様な筋を表面に浮かび上がらせていった。

すぐにそれは、金属的な光沢を帯びた肉塊へと変化した。

「何と……言う事を！」

ゴレミ力は驚きよりもむしろ、哀れみに満ちた声を漏らした。

「オマエもワタシになれ。」

触手の一本がゴレミカへ向けて放たれた。

よけようとせず、ゴレミカは舞う様な優雅さで手を上げた。

白く繊細なその掌中にあつたのは、澄んだ光を発する宝珠だった。

宝珠の輝きに阻まれ、襲い来る触手は稲光を撒き散らして消滅していった。

「……哀れな、虚空の地平から生まれ来た神よ……！」

透き通る様な二つの纖手が花の様に広げられ、尚も繰り出されて来る幾本もの触手に向けられた。

纖指の間には、小振りな宝珠が輝いていた。

宝珠術　念を込めた宝珠により、様々な現象を発現させる技術だった。非力なゴレミカの最も得意とする技だった。

「あなたの、その命の在り方は、この地上を破滅させるのです……。」

ゴレミ力は手を振り上げ、踊る様に宝珠を放った。手を離れた瞬間、辺りの空気は宝珠の放つ無数の色彩

で溢れ返り、レウ・ファアを取り囲んだ。

前頭葉の眼球が一瞬痙攣し、血走った目が剥き出しとなった。

レウ・ファアはその時、恐怖と驚愕という感情を学習した。

抗う間も無く脳髓の神は、宝珠の光が形成する輝く檻の中に捕縛された。

「苦しい。」

光の檻の中で触手がのた打ち、脳髓は収縮と怒張を繰り返した。

「その苦しみも、すぐに終わります……。」

光の檻の前で、ゴレミ力は幼な子を諭す様に囁き、懐からもう一つ宝珠を取り出した。

「封印の中で、永遠にお眠りなさい……。夢も見ない程に深く……。」

ゴレミ力の囁きに反応し、宝珠に光が宿った。

「オオオツツ　！」

レウ・ファアは自身ですら未知の力を振り絞り、檻の中であがいた。

檻の外へとはみ出した触手を通じ、まだレウ・ファアと繋がって変質した木々や岩が更なる変化を始めた。

木や岩だった肉塊に、巨大な瞳の様な模様が次々に浮かび上がった。

電子回路を連想させる金属の筋が肉の表面を縦横に走り、動物の様な伸縮を始めた。

それは新しい命を得たかの様に動き始め、肉の管と変わり果てた木の枝をゴレミ力へと叩き付けた。

微風を受ける様に悠然と、ゴレミ力は僅かな動きで管を躲した。

「オオ　オツツ　！」

変質した木々や岩だった肉塊は、更に周囲へと肉の管や触手を伸ばしていき、辺りを赤黒い金属質の肉塊へと変えていった。

脳髓の神は絶え間無い伸縮を繰り返し、檻の外の肉塊に命令を送った。

宝珠を一つでも砕けば檻は破壊出来る。

そう分析したレウ・ファアは、木の原型を留めない程に変質した、蛇の様な肉の管を宝珠に絡み付かせた。

「いけないっ……！」

宝珠に絡み付いた肉の管が小刻みに震え、打ち砕こうと力んだ。

慌ててゴレミカが封印の宝珠を投げ付けたと同時に、宝珠の一つが砕け散った。

光の檻に亀裂が生じ、その隙間をめがけて内と外から無数の肉の管と触手がたかつていった。

レウ・ファアが、こじ開けた穴から急いで這い出た瞬間、封印の宝珠が崩れかけた光の檻に衝突した。

まばゆい白光が森の中を走り抜け、辺りは一瞬、白銀の閃光の中に呑み込まれた。

光の退いた後、再び森の風景が甦った。

一つ目の脳髓は、力無く下草の上に横たわっていた。

そのすぐ上には、掌程の大きさの妖しく輝く球体が浮かんでいた。

闇の色そのものの、漆黒の輝き。

それは心臓の鼓動を思わせる点滅を繰り返していた。脳髓の神そのものの、昏い気配を辺りに撒き散らしながら、その球体はレウ・ファアの元へゆっくりと下降していった。

その球体　　神の生命力、神霊力そのものの結晶、神

霊石は、再びレウ・ファールと同化すべく脳髓の中へと溶け込もうとしていた。

「……せめて、神霊石だけでもっ……………！」

閃光に眩んだ目を押さえながら、ゴレミカはレウ・ファールの許へ歩み寄った。

ゴレミカの放った封印の宝珠は失敗し、レウ・ファールから神霊石を分離させるだけに留まったのだった。

「アアツツ！ ツツ……………！」

絞り出す様に呻き声を上げ、レウ・ファールは頼り無げに神霊石へと触手を伸ばして縋り付いた。

「しまった！」

ゴレミカも慌てて漆黒の神霊石へと手を伸ばした。

「くツ、来るなアアツツ！」

レウ・ファールは残された力を振り絞り、まだ自分に繋がっている周囲の肉管をゴレミカへと叩き付けた。

「きゃああつつ……………！」

背後から力任せに殴り倒され、灌木の茂みにゴレミカは頭から突っ込んだ。

服に絡み付く木の枝を掻き分けて、這い出ようとともがくゴレミカへ肉の管が更に襲い掛かった。

ゴレミカは瞬く間に体の自由を奪われてしまった。

「……これは、私の……物だ……………」

脳が震え、喘ぐ様な声がゴレミカの耳に届いた。

レウ・ファールはゆらゆらと宙に浮かび上がり、己の神霊石へと覆い被さった。

神霊石は微細な震動を始め、じわじわとその輪郭を失っていった。

その変化に気付き、ゴレミカは焦りを覚えた。

細い腕が、赤黒い肉管に締め付けられた中で懸命にあがいた。

「うつつ……。」

そうする内に、衣の懷から幾つかのきらめく粒が、地面へと零れ落ちていった。

落とすまいと手を動かし、ゴレミカが辛うじて掌中に留めたのは「爆発」を起こす宝珠だった。

自分の神靈石の吸収へと注意を奪われたのか、ゴレミカを絡め捕っていた肉管の力が幾分緩んだ。

見ると、啜る様に震える脳髓の中に、神靈石が半分近く呑み込まれようとしていた。

「！」

管に腕の動きを阻まれて投げ付ける事も出来ず、ゴレミカはボーリングの要領で宝珠をレウ・ファーへと転がした。

緩やかな動きで、ささやかな一筋のきらめきは、脳髓の神へと迫った。

貪る様に神靈石を啜る彼の神は気付きもしなかった。

脳髓を取り囲んだ触手のうねる間近に宝珠が到達した時、ゴレミカの念を受けて爆炎が巻き起こった。

「ギアアア、…… ツツツ オオツツツツ！」

絶叫と悲鳴が、炎と共に飛散した。

べしゃっ、と湿った重い音が何処かの岩肌に叩き付けられた。

それからすぐに別の方向から、小さな何かの塊が地面へと落ちる音がゴレミカの耳に届いた。

主からの指令を失い、もはや身動き一つしない醜い肉の塊に成り果てた管を振り解くと、ゴレミカは音の起こった方向を目指した。

ゴレミカが暫く歩くと、先程の爆発で吹き飛ばされた神靈石は、濃緑の下草の上で、闇そのものの様な漆黒の輝きを放っていた。



その辺りにはまだレウ・ファアの浸食は無く、清浄と静寂に支配された森の風景があった。

神霊石の闇の輝きは、しかし半分に損なわれていた。

「こつ、これは……！」

レウ・ファア本体へと吸収半ばで引き離された神霊石は再び物質化していたが、それは丁度、ガラス玉が砕けたかの様に半ばから欠けた姿を晒していた。

ゴレミ力は急いでそれを拾い上げた。

心の底から絶望と虚脱に冷え切っていく様な、あるいは怨念と憎悪に焼き尽くされていく様な感覚が、ゴレミ力の指先を刺し貫いた。

あの神は何処へ？

欠けた神霊石を抱え、ゴレミ力は辺りを見回した。

レウ・ファアの姿は、神霊石のあった場所からやや離れた木立の中にあった。

照葉樹の若木が幾本も根を食い込ませた岩肌に、黒い血と半透明の真紅のゼリー状のものが糊塗されていた。緑と土の色の濃淡で築き上げられた森の光景を汚すかの様に、闇と血の撒き散らされた中心に一つ目の脳髄はあった。

「もう お眠りなさいね……。」

尽きる事無く懷から宝珠を取り出し、ゴレミ力は再び封印の為の宝珠を手にも構えた。

「オオオオツツッ！……オオオオツツッ！」

ゴレミ力の姿を認め、レウ・ファアは血走った眼球を極限まで見開いた。

半ば脳の形は崩れ、半透明の中身が漏れ出していた。レウ・ファアは残された力を振り絞り 空高くへと飛翔した。

逃げるレウ・ファアへと、森の木漏れ陽を受けた八つ

のきらめきが追いつがった。

だが、触手へと触れる寸前で、宝珠は地面へと失速した。

「ああ……何と……っ！」

ゴレミ力は落胆の声を上げた。

脳髓の神の姿は紺碧の空へと遠ざかり、鮮やかな青い色彩の中の暗黒の一点と化した。

それはすぐに霞み 空を渡る微風に洗われたかの様に、何処へともなく消え去ってしまった。

後には落胆に立ち尽くす女神の後ろ姿と、主を失って壊死をし始めた肉塊と管の山が残された。

ゴレミ力は知らず、あの神の神霊石を強く握り締めていた。

再び掌を襲う、刺す様な感覚に視線を落とすと。

ひたすら深く、黒い石の輝き。

触れているだけで、掌が黒く染まっていくなかの様な錯覚があった。

この地上の世界ではない、遙か彼方の、昏く何処までも深い地平へと続くべき黒。

虚空の深淵の、全ての尽き果てた場所へと押し流される筈だった諸々の昏い想念の一掬い……

そこから、あの禍々しい脳髓の神は生まれ出た。

他の命を・世界の全てを侵し、蝕もうとする剥き出しの・余りにも純化された欲望と執念の結晶。

彼は、この地上に来るべきではなかった。

神霊力が半減したとは言え、やがてこの地上に災厄をもたらす存在になるかも知れない。

ゴレミ力の懸念は六百年後、現実のものとなった。

## 第2章「兆候」

六百年後、メル・ロー大陸、ダイナ山脈。

天と地と海とに幾多の神々が宿り、世界にはあまたの命が日々の営みを変わずに繰り返していた。

神々の命の営みと共に流れる悠々たる時間に、世界は支配されていた。僅か六百年の時間は、世界に微々たる変化しか与えてはいなかった。

ダイナ山脈も然り。

地下にマグマの流れを有する、峻厳たる神々の山の連なりは、あちこちに豊かな温泉の恵みを変わずにもたらし続けていた。

里に近い山裾には温泉宿が幾つも栄え、神々や人間が湯治に訪れていた。

中でもダイナ山脈の南端は、灼熱の山々を司る灼熱神バギルの神殿があり、大きな温泉郷として栄えていた。

その夜バギルは、自分の久方振りの帰郷を喜ぶ神官や親神達の設けた宴席を抜け出して、神殿の麓の温泉宿へと向かっていた。

真紅の衣を纏ったしなやかな肉体。強い意志の漲る朱色の双眸。

獣の様な敏捷さで崖を駆け降りる様は、炎の矢が走り抜けたかの様だった。

灼熱神バギル　活火山を擁するダイナ山脈の化身、灼熱の炎を司る若き神だった。

暫くして、バギルは神殿の麓のホテルへと到着した。ホテル「ヴィラ・ディアイラ」・・神殿の麓で営業し

ている温泉宿の一つだった。

「待たせたな！」

湯煙の立ち上る露天風呂に、引き締まった体が飛び込んで来た。

勢い良く湯と煙とを巻き上げた後、バギルは広い湯船に横たわる様に身を沈めた。

「もおっ！もつと静かに入ってよー。」

湯の飛沫の直撃を受け、べったりと髪が張り付いた顔がバギルを見た。

「悪イ、悪イ。」

悪びれもせずに笑い、バギルは体を起こした。

浅黒い筋肉質の肌を、赤く濁った湯が滑り落ちた。

拗ねた様に口を尖らせる、僅かに年上の幼馴染みの前髪を掻き上げてやると、人の良さそうな細い糸目と第3の目が現れた。

額に第3の目を頂く神はそう多くはない。

ヒウ・ザード 彼は幻神と呼ばれる、幻を司る神々の内の一柱だった。彼ら幻神は、額の瞳で神々や人間に幻を見せ、惑わせる能力を持っていた。

「ザード、そんなに怒るなっ！」

バギルは再度笑い掛けた。

ザードは拗ね続けているらしい表情で、バギルを軽く睨んだ。

だが、穏やかに笑っている様にしか見えない糸目のせいで、全く迫力に乏しかった。

ザードは睨む事を諦め、自らもまた横たわる様に湯の中に沈み込んだ。

バギルよりは幾分細く痩せ気味の体が、赤濁の湯の中を見え隠れした。

「ホントに久し振りだねー。」

湯の温もりに心地良さそうに息を吐き、ザードは話し掛けた。

「……半年振りか。」

ふと、バギルは遠い目をした。

バギルは2年程前から、冥王ヴァンザキロルの下に弟子入りし、冥界で武術の修行に励んでいた。

冥王の桁外れの強さに惚れ込んだバギルが強引に弟子入りの神殿へと帰省するのが習慣となっていた。いらしかった。

半年に一度休暇をもらい、バギルはダイナ山脈南端の自分の神殿へと帰省するのが習慣となっていた。

「あつと言つ間だなあ……。」

この半年間の修行を思い返し、バギルは溜め息をついた。

そこに。

不意に、小さな揺れが辺りを襲った。

湯が俄に波打ち、周りの岩を叩いた。

「地震？」

ザードは不安げな表情で周囲を見回し、バギルの腕を掴んだ。

だが、揺れはすぐに治まり、再び辺りに静けさが戻って来た。

僅かな間を置いて、今の地震について心配は無いという旨のホテルの放送が流れ始めた。

放送を聞き流しながら、バギルは露天風呂からも眺められるダイナの山並みへと目を向けた。

夜の闇に沈む峻険な山々は、三つの月と星々のささやかな光を受けて茫洋と浮かび上がるのみだった。

「そついや、最近変な地震が多いってウチの神殿の連中が言ってたな。」

火山帯が地下を走っている為、ダイナ山脈の近辺は地震が多い事でも有名だった。

だが、灼熱神の知覚は、火山活動の気配を微塵も捉えてはいなかった。

彼の見立てでは、ここ四百年程は小さな噴火すらこの地では起こらない筈だった。

「大丈夫だよ、ね？」

ザードはまだ不安な表情でバギルを見た。

小さな地震の一つで首を傾げている灼熱神の様子に、漠然とした不安を感じていたのだった。

「おうつ！この俺様が保証するぜっ！」

自信に満ちた笑みをザードに向け、バギルはザードの頭から湯を浴びせかけた。

「なっ、何するんだよぉ！」

湯船から立ち上がり、情けない声を上げながらザードは尚も浴びせられる湯から逃れようとした。

「もぉっ！」

子供染みた動作で腕を振り回し、ザードはバギルへと反撃を始めた。

「きゃぁぁっ！」

不意に、彼らの背後で小さな悲鳴が上がった。

「……ごっ、ごめんなさい……。」

ザードが慌てて振り返ると、二人の入る湯船の近くに設けられた通路にまで、湯の飛沫が飛び散っていた。

ザードが更に顔を上げると、ずぶ濡れになった女性の姿が目に入った。

「……あれ？ゴレミカ…様？」

湯に濡れた顔を掌で拭ってバギルが目を向けると、見覚えのある後ろ姿が佇んでいた。

腰まで届く、緩やかに波打つ豊かな髪。頭の両端でそ

れを結わえた、古式の文様を刻印した髪飾り。

ただ、この日は珍しく宿の浴衣を身に着けていたのだが。

「すみません、大丈夫ですか？」

ザードは浴衣の裾から湯を滴らせるゴレミカを心配そうに見上げた。

「ええ……、お気遣い無く。」

過去と哀しみの女神は別段取り乱した風も無く、穏やかに応えた。

もし顔がこちらを向いているのであれば、優雅な微笑を浮かべているに違いない。

「珍しいなあ。湯治つスカ？」

余り礼儀をわきまえているとは言い難いバキルの問いにも、ゴレミカは気分を害した様子も無かった。

「ええ……。暫く静養に。とてもいい土地ですね、ここは……。」

微笑んだのだろうか。

空気が柔らかに震える気配があった。

「それでは。」

「あ……ども。」

やはりゴレミカは後ろ姿のまま、ゆったりとした歩みでバギル達から遠ざかっていった。

「なーんか、匂うぞつ。」

バギルは食事を終え、ロビーへと歩く途中で立ち止まった。

「何があ？」

その横でザードは不思議そうにバギルに尋ねた。

「あのゴレミカが里に滞在するなんて滅多に無い事だぜっ！絶対、何かあるっ！」

ゴレミカは常日頃から他の神や、ましてや人間の前に姿を現す事は滅多に無かった。住所は神国神殿となつてはいるものの、そこですら姿を見る事は殆ど無いといつてよかった。

ゴレミカの滞在目的をあれこれ推理している幼馴染みを横目で見ながらザードは小さく溜め息をついた。

バギルは何か事件があつたらそれに首を突つ込みたいだけのだろう。

ゴレミカの部屋番号を尋ねにフロントへ足を向けたバギルの後を、ザードは呆れながらもついて行つた。

受け付けで尋ねたところ、ゴレミカは外出したと告げられた。

「行き先ですか？そうですねえ。よく山の向こうに出掛けておられる様ですが……。」

受け付けで話を聞き、バギル達は早速宿の裏庭へとやって来た。

裏庭にはよく手入れの行き届いた植え込みから、原生の山林へと続く遊歩道があつた。それはまた、ダイナの山々へと続く道でもあつた。

「ねえ、もお帰ろうよお……。」

ザードの訴えも、好奇心と野次馬根性の塊と化したバギルには届かなかつた。

「大丈夫、大丈夫！」

一体、何が大丈夫なのだろうか。

「ほらっ、早く来いよ！」

仄暗い照明に浮かび上がる山道を、早くもバギルは駆け上がり始めた。

「はいはい……。」

ザードは肩を落とし、呆れた様に息を吐いた。



バギルの俊足に追い付くべく、ザードは飛翔型の幻獣を召喚して跨がった。

幻獣 それは幻神がその能力をもって創造する疑似生物だった。

不規則な楕円や流線から構成される幻覚的なデザインを持つその創造物は、主の思念によって誕生し、その命令に絶対の服従を行った。

一度創造された幻獣は、破壊されない限り異次元空間に保管され、主である幻神の求めに応じて地上へと召喚されるのだった。

およそ飛ぶ事とは無縁としか思えない、胴体よりも遙かに長い突起を幾つも伸ばし、幻獣は主を乗せて羽ばたいた。

奥へ進むにつれ、小綺麗に整備された石段は獣道へと変わり、足元を照らす照明は下界へと遠ざかった。

この名前ばかりの道が、現在では殆ど使われる事のない、昔の街道の名残だという事をザードは知る由も無かった。

冥界での鍛練の賜物か、月明かりが僅かに差し込むだけの山道を、バギルは苦も無く駆け抜けていった。

呼吸一つ乱れていない様子に、ザードは感心した。

と同時に、疑問や驚嘆がない混ぜになった感情をザードは抱いた。

あのたおやかな女神は本当にこの道を進んで行ったのか？・・・事実であれば、女神の能力に驚かずにはいられない。

暗がりでは分からなかったのだが、山を一つ越えたと思われる場所で、バギルとザードは一つの立て札を目にした。

『過去と哀しみを司る、我が名はゴレミカ。この名の下

に、これより先への立ち入りを禁ずる。』

照明も無い夜の山中で、大きな金属板に刻印された文章だけが、妖しい光を放っている様だった。

何かしらの呪力が封じ込められているらしい文様と文章は、心理的な圧力を掛ける為の一つの装置だった。

「ゴレミカの使用地か。」

バギルは立て札の威圧感に臆した様子も無く、更に奥へと続く道を眺めた。

ダイナ山脈一帯は灼熱神の領地となっていた。

勿論、領地といっても独占している訳ではなく、山中には様々な神々や精霊達が住んでいるし、幾つかの集落もあった。

また、ダイナ山脈に限らない事だが、幾つかの場所についてはゴレミカのような位の高い神が、何かしらの理由があつて特権的に使用を認められていた。

大抵が、地上に害をなす存在　邪神や魔物などの封印に関連していたのだが。

「ねえー、もお帰るおよおーつ。」

立入禁止の立て札に怯え、ザードは幻獣の上からバギルの腕を引っ張った。

「　　そうだな……。でも、折角ここまで来たんだし、もうちょつと奥まで見ていこうぜ。」

好奇心の塊と化した幼馴染みに、ザードは肩を落としたりした。

こういう高位の神々の特権的な使用地と言えば、魔物の封印場所と相場が決まっている。

一体どんな恐ろしい存在が封じられているのか分かったものではないのに。

内心あれこれと文句を並べ立てながらも、ザードは幻獣ごとバギルの背中にくっついて離れようとはしなかった。

た。

ザードの怯えは長くは続かなかった。

立て札を越えて暫く行くと、夜の闇の中を横切る淡い光の帯が二人の目に入った。

ゴレミカの施した結界の光の壁だった。

「まあ、これ以上は進めないね。」

ザードはほっとした様に息を吐き、バギルを見た。

だがザードの糸目に映じたのは、先刻までの好奇心に満ちた野次馬ではなかった。

「この封印、弱まってるぜ……。」

バギルの真剣な視線が光の壁に注がれていた。

綻び、弱まり始めていた結界壁のエネルギーの様子と壁の内側と外側から流れてくる禍々しい気配が、バギルの知覚に捉えられた。

結界の内側から漏れ出している邪悪な気配に惹かれて来るのだろう。

誘蛾灯に惹かれる羽虫の様に、結界の綻びを目指して這い寄るものの気配があった。

「……！」

バギルは庇う様にザードを背後に押しやった。

幼馴染みの真剣な表情への変化に、ザードも覚悟を決めた。・・やれやれと、一つ溜め息をついた後に。

下草の茂みを割って木々の間を歩いて来る音がした。

何か鱗の様なものに覆われているのだろう。それが歩を進める度に、硬質の金属が擦れ合う様な響きが起こっていた。

結界の柔らかな光を受け、暗い無数のきらめきを纏った獣が姿を現した。

普通の獣には似つかわしくない、破壊と殺戮を渴望す

るぎらぎらとした目の輝きが、それが魔物である事を物語っていた。

「へえっ？ 仲々大物がやって来たじゃねえかあ？」

半ば楽しむ様な感情がバギルの声に滲んでいた。

「お前はここを動くなよ！」

バギルの言葉にザードは大きく頷いた。

先手必勝。

魔物はそう判断したのか、牙までも鱗に覆われた口を開き、バギルへと襲いかかった。

きらめきをまとった斬線が宙を走り、魔物の牙がバギルへと炸裂した。

「！」

衣服一枚を裂けさせるに留めて身を躲し、バギルは炎の矢を放った。

が、灼熱の矢は鱗の表面を僅かに焦がしただけだった。

再びバギルへと向かって来るかと思われたが、魔物は唸り声を上げて結界壁へと突進して行った。

バギルへの殺戮よりも、邪気へと惹かれる本能が勝つたらしかった。

鱗に覆われた拳が光の壁を叩き続けた。

「ちっっ！」

バギルは何度か炎の矢を放った。

しかし炎は空しく魔物の鱗を撫でるのみで、既に魔物はバギル達の事など忘れ果てた風だった。

魔物は声一つ上げる事無く、ひたすらに結界壁を殴り続けていた。

そうする内にも、壁の一部に歪みが生じ・・・魔物の拳が壁の向こうへとめり込んだ。

バギルの表情に焦りが走った。

このまま結界を破壊させる訳にはいかない。  
バギルは素早く自らの拳へ精神を集中した。

「ザードッ！離れてろよっ！」

バギルの声に、ザードは幻獣に乗ったまま、慌てて数歩分後退した。

精神の集中に伴い、バギルの拳は瞬く間に白炎に包まれた。

「うおおおつつつ つつ！」

拳は灼熱の弾丸と化して魔物へと飛んだ。

魔物の鱗を難無く破り、体内へと放たれた炎熱は魔物の内臓を瞬時に焼き尽くした。

だが。

焼け崩れるかと思われた魔物の体は、体内の何かの物質に引火したのか、激しい爆発をもたらした。

結界壁にめり込んだ腕の爆発は、綻びかけていた結界を一気に引き裂いた。

「うわあああつつ ！」

歪み、引き裂かれていく結界は、周囲の空気を動揺させ、突風を巻き起こした。

幻獣から振り落とされ、ザードは地面へと叩き付けられた。

「ザードつつ！」

激しい爆煙の直撃を浴びながらも、傷一つ負っていないバギルは慌ててザードの元へと駆け寄った。

灼熱のマグマの流れを司る彼にとって、この程度の爆発など微風に等しかった。

気絶したザードを抱え起こしたところで、バギルは背筋に悪寒を感じて背後を振り向いた。

ゴレミカの施した結界の戒めを解かれ、壁のあった彼方から、何かが弾き出される気配があった。

恐らく、この結界の内側にも何重かに封印の為の壁や設備が設けられていたのだろう。

それらが、この場所の結界壁が無理に破壊された為に均衡を崩し 連鎖反応的に崩壊した。

底知れない暗黒の一塊は、禍々しい気配を垂れ流しながらも尚、夜の闇の彼方で留まっていた。

気を失っていたザードの意識の中に、潜り込んで来るものがあつた。

「……………」

耳元で囁き掛けて来る様な、誘惑の微かな声。

力が、欲しくはないか？

不安に付け入る様な、或いは全ての欲望を見透かしているかの様な囁きだった。

苦悩し、不安に苛まれる者にこそ、力は与えられるべきなのだ。

それは、封印の中身からの呼び掛けではなかったのかも知れない。

ザードは無意識の内に、封印の中身が何であるかを感じ取っていた様だった。

無力で脆弱な自分の能力を、それは補い高める事が出来る。

邪で大きな力を前に、ザードの内の欲望が触発されたのだろうか。

独り成り。

ザードの欲望か、封印の中身か。暗い呼び掛けはザードの意識を刺激し続けた。

独り成り ザードには確かに大きな力を渴望する苦悩と不安が内在していた。

神の身でありながら、幻神は塵芥の様に自然発生する

低級な神だと、一部の傲慢な神々や人間達に見做されていた。

独りでに生まれる「独り成り」と蔑称され、差別を受ける事もあった。

今でこそ、差別と蔑視は一部の地域に留まりつつあるのだが、それでも尚、幻神には差別やそれによる孤独の影が付きまとっていた。

### 孤独。

灼熱神バギルは、ザードが幼い頃からの友達だった。しかし、バギルは冥王ヴァンザキロルの下へと修行に去って行った。

彼は、友と過ごす事よりも、自分の力を伸ばす事を選んだのだ。

拭い去り難い孤独への不安は心の奥底に沈潜し、ザードの心を苦しめ続けた。

結局、幻神の自分は独りで、誰からも取り残されるのだろうか？

「力を……。」

無意識の中で、ザードは夜の闇の向こうへと手を伸ばした。

ザードの眩きを逃さず、封印されていたものは掌中へと飛び込んで来た。

どんな闇よりも尚深い、遠い彼方からやって来た黒。

一瞬にして掌からザードの体内へと溶け込んだのは、半分に欠けた漆黒の神霊石だった。

それは、六百年前にゴレミカによってこの土地に封印された、あの異形の脳髓の神のものだった。

程無くして、ザードの眉間の瞳を鋭い痛みが貫いた。

痛みと同時に、頭の奥深くへと侵入してくる物の気配があり、激しい頭痛と吐き気が起こった。

「うぐつつ、　　ううつ……。」

「ザードツツ!？」

気絶したままもがき始めたザードにバギルは焦った。すぐにザードの変調は治まったが、バギルはザードを抱き上げると、元来た道を引き返していった。

こんな事になるのなら、来るのではなかった。

後悔の念に心を傷め、バギルは矢の様に山道を疾駆した。

破壊された結界も、その中身がどうなったかも、バギルの頭からは抜け落ちてしまっていた。

ゴレミカが同じ場所を訪れたのは、バギル達が立ち去ってから数刻の後だった。

破壊された結界より何より、封印されていた神霊石が失われていた事に女神は驚愕した。

「ああ……、もっと早くに来ていれば……。」

結界の境目に出来た爆発の窪みと、飛散する魔物の焼け焦げた肉片。

ここで何が起こったのか、ゴレミカは過去透視の宝珠を放って情報を得た。

「ヒウ・ザード……。あの神が。」

数刻後の未来にありながら、ゴレミカはこの場で起きた事の、無意識の領域までも知り得たのだった。

もっと早くに来ていれば。

ゴレミカはもう一度深く悔やんだ。

六百年の時間を経て、結界を支えるエネルギーは消耗していた。再び結界を設ける準備の為に、ゴレミカはこの土地に滞在して体力と精神力を蓄えていたのだった。

驚愕と後悔に乱れる心をなだめながら、ゴレミカは結界のあった場所を越えて、封印の中心部へと進んでいっ



た。

この場所には、まだ結界を構成していたエネルギーの残滓がくすぶり、あちこちに小さな稲光が噴き上がっていた。

封印の中心部も確かめておかねばならない。いずれにせよ、この場を放置したまま立ち去る事は出来なかった。

まあ、いい。神霊石を持ち去った者は分かったのだから。

ゴレミカはそれだけを慰めに足を進めた。

### 第3章「復活」

寝苦しさにザードは目を覚ました。

夜の闇の中に一瞬、失見当識に陥ったが、布団の感触と時計の文字盤の発光に、宿の部屋に居るという事を何とか理解した。

まだ半ばはぼんやりとする頭で体を起こし、ザードは室内を見回した。

隣のベッドではバギルが半身を起こしたまま、壁にもたれる様にして眠っていた。

そうだ。自分はあの山の中で気絶して・・・。

気絶していたにも関わらず、漆黒の神霊石を掴み取る感触と、頭痛と吐き気の事はザードの記憶に刻み込まれていた。

ザードは無意識の内に眉間の瞳へと手を遣った。痛みを伴う小さな疼きが、まだ残っていた。

ザードの内へと飛来したものは、確実にザードの体内に宿っていたのだった。

「んー……。」

寝言だろうか。何事かを呟きながらバギルが体を動かした。

バギルの事だから、寝ずに看病するつもりが途中で寝入ってしまったのだろう。

「！」

感謝の念に混じって、別の感情が湧き上がっている事に気付き、ザードははっとした。

独り成り。

何故、自分はバギルと共にここに居るのだろうか？

友達だから　いや、そうではない。

……自分が幻神だからだ。誰か有力な神にすがっていないと生き辛いから。差別と蔑視に晒されて生きていくのは難しいから。

自分は一体何を考えているのだろうか？

次々と湧き起こる暗い思いを掻き消そうとするが、それは徒労に終わった。

幻神。

幻神であるザードには何の力も無いし、誰も親しくなどしない。

自分に力があれば、他の神に媚びへつらったりなどしないのに。

バギルと付き合っている中で、心の奥底にザードも気付かない内に芽生えていたものがあつた。

幻神である事への劣等感や、他の神々への憎しみや怒り。

それらは今、ザード自身の抑制を離れ、大きく膨れ上がろうとしていた。

ザードの心の変化など知る由も無く、バギルは穏やかな寝息を立てて眠っていた。

ザードは冷たい憎しみの炎が、胸の内を焦がし始めている事に気付いた。

自分が自分でないものへと塗り替えられていく……得体の知れない不安と怯えも、いつしか再びまどろみの中に引き込まれていく内に、消え去っていった。

翌朝。バギルとザードは宿を後にした。

「神殿には戻らなくてもいいの？」

晴れ渡った青空に映えるバギルの神殿を指差し、ザードは尋ねた。

「別にいいや、面倒臭え。」

いつもの事だし、ウチの

連中も気にしねえよ。」

バギルは屈託の無い笑みを浮かべて答え、それからザードの顔を覗き込んだ。

「それより、もう体の具合は大丈夫なのか？」

バギルの問い掛けに、ザードは微笑みを返した。

「うんー。何とか大丈夫。」

「そっか……。」

バギルはザードの微笑に安心した様に息をついた。

だが、微笑みながらもザードは、時折疼く眉間の痛みに不安を感じ続けていた。

「じゃあ、行こうぜ。」

バギルに手を引かれ、ザードは歩き始めた。

二人が向かう場所は神国神殿だった。

ダイナ山脈のあるメル・ロー大陸から神国へ行くには船が唯一の交通手段だった。

飛行機や瞬間移動　テレポーションなど、もっと便利な方法も無い訳ではなかったが、さほど一般的な手段ではなかった。

ダイナ山脈南端から古びた列車で2時間程。

バギルとザードは神国行きの船の出ている小さな港町へと到着した。

「幻神よ……。」

「まあっ！………本当、嫌だわ！」

駅から港へと向かう途中、人間達の嫌悪に満ちた囁きがザードの耳に入ってきた。

行き交う神々や人間達の無遠慮に注がれる視線に、ザードはバギルの後ろに隠れる様にして歩き続けた。

額の第3の目は、ザードが幻神であるという事を一目で分かせていた。

縦に長く裂け、淡く濁った白い膜が掛かった瞳。  
瞳といっても幻神の場合は視覚には関係が無い。幻神  
の能力を調節する為の器官だった。

この世界全ての神々の集い来る神々の中心地、神国神  
殿では流石に露骨な差別や蔑視は無かった。

だが、この港町の様な地方や辺境では、根強く差別や  
偏見が残っていたのだった。

独り成り。

他者からこう蔑まれると同時に、ザードもまた同じ言  
葉を呟き、悲しみに唇を噛み続けて来たのだった。

だが、しかし。

憎しみ、屈辱、怒り　今迄抱いた事の無い異質な感  
情が、ザードの中に膨らみ始めていた。

出航まで暫く時間があり、二人は港の喫茶店で食事を  
取る事にした。

「これとこれを。」

バギルの注文を聞き終わるとすぐに、人間のウェイト  
レスは強張った表情で足早にカウンターの中に引っ込ん  
でしまった。

決してバギルが高名なダイナ山脈の灼熱神だという事  
で、人間が緊張していると言う訳ではなかった。

ザードは店に入ってから終始無言のまま、窓の外の  
景色を眺めていた。

今まで、何度となく繰り返されて来た他の神々や人間  
達の反応に、ザードは今更、何の思いも抱いてはいなか  
った。

バギルもまた、無言のまま同じ様に外を眺めた。

港には幾つかの大きな客船が停泊し、船員達が慌ただ  
しく出航の準備をしていた。

バギルには、ザードの痛みも悲しみも分かってやる事は出来なかった。お互いの幼い頃から共に過ごして来た身であっても、疎外され、嫌悪される辛さは本当には分かってやれない。

ただ、黙って側に居る。

それだけが、バギルに出来る唯一の事だった。そしてザードも、それによって慰められていた。

自分は独りではないのだと。

他の誰もが自分を疎んじたとしても、バギルだけは決してその者達とは違うのだと・・。

また、額の腫に痛みが走った。

慰められ、穏やかさを取り戻しかけたザードの心を、その痛みは再び掻き乱そうとした。

バギルは自分を置き去りにして冥王の下へと行ってしまったのではなかったか？

ザードが思っている程、バギルはザードの事を大切に思っていないのではないか？

ザードの心に昨夜の様に冷たい炎が揺らめき始めた。

「幻神がこんな所をうろつかないでええつつ！」

ヒステリックな女の金切り声に二人ははっと顔を上げた。

じゃきつ　と、はさみが布を裂く音が女の声に続いた。

ザードとバギルは一瞬、呆気に取られて何が起こったのか理解しかねた。

バギルはザードの黒い肩掛けへと目を移し・・素早く立ち上がると、逃げ去ろうとしていた人間の女の腕を捻じり上げた。

顔を見ると、やや年がいった様な人間の中年の婦人だった。

「放してちょうだいっ！乱暴しないでっ！」

婦人は大きな目の布切り鋏を振り回して喚き立てた。

「乱暴はあんただろうがっ！」

バギルと女性のやり取りを呆然と見ながら、ザードは自分の肩掛けへと目を落とし・・ようやく、切り裂かれている事に気が付いた。

行き過ぎた差別感情による嫌がらせ。

幻神に限らず、何らかの差別を受けている者達に対しては時折起こる事だった。

ザードはぼんやりと、切り裂かれた肩掛けへと手を当てた。

「ダイナ山脈の主神ともあろう方が、何故こんな幻神なんかと一緒にられるのですかっ!？」

婦人は尚も、バギルに腕を掴まれたまま叫び続けた。

店内の人間達も、むしろ婦人の方に同情的な視線を送っていた様だった。

「幻神はかつて、この土地一帯を荒らし回ったのですよっ！」

「いい加減にしろっ！」

バギルの怒鳴り声にも、婦人は怯む様子は無かった。

彼女の主張はごく一部、真実が含まれていた。

二、三百年前に、ダイナ山脈南部地方の町や村を破壊し、略奪を繰り返した盗賊団が存在していた。その集団の主立った者の中に幻神が多くいたのだった。

それが古くからあるこの地方の神々や人間の、幻神への差別感情と結び付き、一層根深い嫌悪と侮蔑の感情へと変化していったのだろう。

「バギル……もう、いいよお。」

いつもの事。こんな人間達の差別は。

ザードは諦め切った表情で穏やかに口を開いた。

「……！」

その瞬間。

ザードの頭の奥深くが、激しい痛みに貫かれた。

何故、自分がこんなに卑屈にならなければなら  
ないのだ？

何故、こんな連中に自分が……。

ザードの心の奥底に沈潜し続けていた、怒りや恨み、  
憎しみ それらが堰を切った様にザードの心の表面へ  
と溢れ出して来た。

自分の心が、自分の内側から激しく突き上げて来る衝  
動によって塗り替えられていくのをザードは感じた。

息を吸って、吐く。

その僅かの だが、ザードにとっては長い時間、心  
の中でそんな変化を拒む自分と望む自分がせめぎ合い  
そして。

「人間如きが……っ、身の程知らずめ。」

細い目が、冷酷な色を宿して一層細められた。

突然ザードの口から漏れた言葉に、バギルは耳を疑っ  
た。

この穏やかな幼馴染みの何処から、このような言葉が発  
せられたのだろうか。

「このボクを……、よくも侮辱してくれたね……。」

傲然と婦人とバギルを睨め付け、ザードは婦人を容赦  
無く突き飛ばした。

悲鳴を上げる間も無く、彼女は隣の席へ頭から突っ込  
んでいった。

テーブルや椅子が倒れ、備え付けの小瓶の砂糖や食塩  
が、彼女の頭や体に降り注いだ。

「お、おいおい、ザード……。」

今度はバギルが呆然と立ち尽くしていた。



一体自分の目の前で何が起こっているのか、俄には理解しかねていた。

バギルが伸ばした手をザードは冷淡な声で拒絶した。

「汚い手でボクに触るのはやめてよ。」

バギルの手は凍り付いた。

自分の目の前にいるのは、まるで見知らぬ別人の様な

冷淡で傲慢な幻神だった。

何故。一体何が原因で、瞬時の内にこの幼馴染みはこのような変貌を遂げてしまったのか。

混乱に立ち尽くすバギルをよそに、ザードは倒れたままの婦人の前にやって来た。

眉間の瞳が妖しい輝きを宿した。

ザードの精神集中と共に、無数のツタの様な触手に覆われた球状の幻獣が召喚された。

幻獣は主の思念に従い、粘液に覆われた触手を婦人へと叩きつけた。

「いつ、嫌あああつつつ！」

一層甲高い金切り声が店内にこだました。

幻獣の力はそれ程でもなく、むしろ不気味な触手の質感と感触に婦人は嫌悪の悲鳴を上げていた。

「ザード！一体どうしたってんだっ。馬鹿な事はやめろよっ！」

幼馴染みの変化に戸惑いながらも、バギルは婦人へと振り上げられた幻獣の触手を掴み取った。

「うるさいよ、オマエ。」

ぼそっとザードは呟き、疎ましげな目をバギルへと向けた。

自分の暴言を省みる心は、既にザードの奥底へと消え去っていた。

ザードの思念を受け、幻獣は触手を掴み続けているバ

ギルを店の壁へと叩き付けた。

婦人に対しての力とは比べ物にならないのは、ザードのバギルに対する漠然とした憎しみが今、顕在化したからなのだろうか。

激しい力で叩き付けられた痛みにも目を見開いたバギルの表情を見て、ザードは自分の中に暗く激しい感情が高揚して来るのを感じた。

だがそれは、優しさや穏やかさ・……今までのザードの心の全てが、決定的に封じ込められる事でもあった。

もう、こんな奴なんかに付き合わなくてもいいのだ。

悲しい思いもしなくていい。

幻神だという劣等感を感じなくてもいい。

もう、こんな奴の哀れみなんかにはすがらなくても、自分分は生きていけるのだ。

ザードの唇が、不気味な笑みの形に歪んだ。

叩き付けられた壁から滑り落ち、呆然と壁際に座り続けるバギルをザードは見下ろした。

「ボクは、自由になったんだ！……キミなんかより、ずっと強い力を得て！」

何かに取り憑かれている。

ザードの勝ち誇った様な宣言を聞きながら、バギルはぼんやりと思った。

何もかも信じたくない出来事ばかりだった。

バギルはただ、呆然とザードを見上げているだけだった。

「もう、キミなんか要らないよ……。冥王の所でも何処でも、行ってしまえばいいよ！」

バギルを覗き込むザードの表情の、何と冷酷な事か。

「な、なあ……。おいっ、ザード。お前、何を言ってん

だ？俺、分かんねえよ……。」

これが、あの穏やかで優しいザードと同じ神なのだろうか。

「バカなキミには分からなくていいよ。」

バギルの呼び掛けは、ザードの嘲笑に掻き消された。

ザードはずっと不安だった。

幼馴染みと言うものの、バギルは自分の下を遠く離れてしまった。

自分とバギルとの繋がりも、随分と薄れてしまった様な気がしていた。

もう、自分はバギルにとって必要無い存在なのだろうか。

だが。

そんな不安も全て、ザードの内に宿った漆黒の神霊石の力の前に塗りつぶされていった。

必要無いのは、自分ではない。

他の奴らの方なのだ。

自分の気持ちを不安にさせ、動揺させるバギルや他の者達の方こそが、必要なのだ。

「じゃあね。」

ザードは唇の端を歪め、嘲笑う様に言うと、店を飛び出して行った。

「ザードっ！おいつっ！」

初めてバギルは我に返った。

咄嗟に立ち上がり、ザードの腕へと手を伸ばした。

が、その手は空しく宙を掴むのみだった。

店の扉をくぐり抜け、ザードは何処へともなく立ち去っていった。

「サード……。一体、どうしちゃったんだよ……。」

ザードの後を追ってバギルは店の扉を開けたが、既に彼の姿は何処にも無かった。

一体、何がどうなっているのか。

答えなど出る訳も無く、バギルは未だに混乱を続ける頭のまま、扉の前で佇んでいた。

「……また……遅かったのね……。」

突然、バギルの背後で息切れに喘ぐ声がした。

緩やかに波打つ豊かな髪は幾分ほつれ、乱れていた。余程急いでこの場にやって来たのか、細い肩は大きく上下し、息切れはすぐには治まりそうもなかった。

ゴレミカはあれから・・封印の場所に着いてから、その場の後始末に今朝までかかってしまったのだった。

それからザード達の後を辿り、何とか港までやって来たが、ここでもまた、入れ違いになってしまったのだった。

ゴレミカには落胆に沈むゆとりは無かった。

「ゴレミカ……？」

何故ゴレミカがここにやって来たのか、訝しむバギルに構わず、ゴレミカは瞬間移動の宝珠を懷から取り出した。

「ゴレミカツ！」

無視された形となったバギルの激情が一気に弾けた。

あろう事か、発動を始め掛けていた宝珠をゴレミカの手から奪い取り、彼女の背に掴みかかったのだった。

一介の灼熱神風情が、最も古く貴い女神に手を掛けるなど 彼女の信者が目にすれば卒倒するに違いない。

「なあっつ！ 一体全体、何なんだよこれはっつ！ 何でザードがおかしくなっちまったんだよおっ！？」

自らの肩を掴んで激しく揺すり続けるバギルの手を取り、ゴレミカは諭す様に穏やかな声で話し掛けた。

「あなたの幼馴染みは、邪悪な神の神霊石のかけらを取り込んでしまったのです。」

女神の静かな声と、一応の疑問への解説に、バギルの心は落ち着きを取り戻した。

「あなたも、私と共に来ますか？」

ゴレミカの問い掛けに、混乱や怒りによる激情ではない、熱い思いがバギルの中に漲り始めた。

「おおっ！当然だっ！」

ザードへ必ず追い付き、必ず元の優しい幼馴染みに戻してみせる。

ゴレミカはバギルから宝珠を返してもらうと、宙空へと浮かべた。

ゴレミカの思念に反応し、宝珠は青く澄んだ輝きを放ち始めた。

瞬間移動に入る直前、ゴレミカはザードから放たれている神霊石の邪気を探った。

ザードもまた瞬間移動を繰り返し、凄まじい速度で海を越え、島々を跳躍していた。

ザード自身の意志ではない。恐らくは神霊石に操られる様にして、ザードは一つの方角を目指していた。

神国神殿。

進行方向の果てにある都市や集落、様々な神々の神殿や聖地などを考え合わせ、ゴレミカはザードの目的地を直感した。

宝珠は一際鮮やかな輝きを放ち、ゴレミカとバギルの姿をその光の中に包み込んだ。

ザードは、自らの与り知らぬ所から突き上がって来る衝動によって飛び続けていた。

神国神殿へ。

そこに行けば、体内へと宿った力は完全になる。

果てしない大海原を生身で疾駆し、次の瞬間には名も知らぬ小島の地面を蹴り付けて跳躍した。

初めて味わう瞬間移動の感覚に、ザードの意識は高揚していた。

体内の神霊石が、目的地が近付いている事を告げた。  
神国神殿……。

そこに、砕かれた神霊石の残り半分が存在している。

そこに行けば、自分はより強く、完璧になれる。

ザードは恍惚と飛び続けた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8528z/>

---

神国 第壱部～虚しき深淵より来たる者～

2011年12月26日22時48分発行